

散歩道

詩と音楽 -共振するメタファー-

ギブソン 松井 佳子



ストラヴィンスキー曰く、「音楽の深遠な意味と本質的な目的は……交わりの状態、つまり仲間や至高の存在との結びつきを促進することにある」。

比較文学を専門として外国語教育の大学に身を置く私はどうしても「ことば」に対して鋭敏にならざるをえない。しかし昨今のグローバル化の趨勢の中で求められ且つ市場価値を有するのは、おおむね言語の実用的な運用能力である。ここではまさに「ことば」の〈意味〉が重視される。だが「ことば」の持つもう一つの側面である〈音〉に注意を喚起してみると、別の風景が現れてきはしまいか。

私が尊敬してやまないポリグロットの石井米雄先生はご自身、凜とした張りのある高い声でエネルギー溢れる話し方をなさるが、その高低、音量、抑揚、語勢などから私は確かに韻律的で音楽的な心地良さを感得させていただくのである。また石井先生は常々外国語習得の効果的な方法として初期段階における〈耳慣らし〉の重要性を強調されるが、これは単に「音から入る外国語」という聞き慣れたスローガンとは似て非なるものとして捉えられるべきであろう。このようにして〈音〉の世界に思い馳せたら、歴史は遡り「音楽」と「詩」が濃い霧のな

かで手に手をとりあって未分化のまま反響している〈音〉が響いてくるではないか。

ホメロスの詩は元来リラの伴奏と一緒に朗読されていたことから分かるように、ギリシャにおいて詩と音楽は不可分なるものであった。日本でも1970年代頃から詩の朗読会が各地で行われ、白石かずこ、吉原幸子、吉増剛造、片桐ユズルといった吟遊詩人たちがしばしば音楽の伴奏を携えて朗読をされていたが、私はその場に何度も立ち会いながら、音楽と詩の境界線が溶け出していくような妙なる感覚をもつことがあった。〈音〉の中に自分自身が溶け出していくような感覚である。特に白石さんや吉増さんの朗読を聴いていると、語りと歌の区別が空中分解して、〈音〉が連続して打ち寄せる波のように純化されるような気がした。私の耳に届いたのは、話しているのか歌っているのか区別ができないような発話・発声なのである。こういう体験を踏まえると、太古の昔人間のことばは感情表現のメディアとして歌われていたのだと主張したルソーの考え方は理解できるし、人が感情的に話しはじめると、声の音域の幅が広がり音楽に類似してくると指摘したハーバート・スペンサーにも同調せざるをえない。現代と異なり、おそらく歴史の初期には

詩と音楽は分ちがたく結びついたものだったのである。

では詩と音楽の共通点は一体何なのだろうか。ことばのメタファー的使用がモノや事柄の指示語としての用法より先行していたと考えたのはヴィーコやハイデガーだけではない。明確に実証することはできないとしても、おそらく多くの人々がこういう考え方を人生という有線上を歩いていく中で直感として捉えているにちがいない。詩がメタファーであるのは、ある意味で当然の成り行きといえよう。なぜなら詩は<驚き(wonder)>であり、その驚きは意外なものを結びつけると同時に連結していたものを引き離す働きをする。理屈や論理の世界ではなく、素朴な感情の世界である。そして人は驚いたときに、その<驚き>を誰かに今すぐに伝えたいという切羽詰まった気持ちになる。他者との触れ合い/交わりを希求するのである。「共鳴」や「共感」あるいはコミュニケーションへの傾斜が確認される。詩は主観的な情動の喚起から生まれ、読み手に情動のうねりを引き起こし、共感の同心円は広がっていく。では音楽はどうだろう。そこにあるのはやはり詩の場合と類似していて、世界を模倣するでもなく事物を指示するわけでもなく、意味を創出するのでもない世界。ではなぜ人は音楽を聴き、感動して涙を流したり、高揚感にうち震えたりするのだろうか。

ここで音楽映画の傑作「不滅の恋 ベートーヴェン」を例に挙げることにしよう。もちろんこの映画にみられる物語性がベートーヴェンの人生に対する人間的興味と呼応してヒューマンドラマを形作っているわけだが、それにもましてこの映画を傑作にしているのは音楽の<音>そのものだといえる。ここでは人間の情動・感情のうねりが切実な必然性を伴って音楽として結晶化されている。私はこの映画を観ながら、途中で目をつむりたくなり画像が消滅してくれることを願いさえしてしまったが、それほどまでに直感的で詩的感性に満ちた「共感」の世界がゆらめきだっていた。実用的価値がほとんど認知されていない詩と音楽は実は、理性や概念的思考や論証ではつかみきれない過剰物としての人間の感情/情動を掬い取ってそれを螺旋状に巻き込みながら人の輪を遠心的かつ求心的に拡大させていく働きを担っているのではないだろうか。それはこの実証主義的な傾向の強い現代世界において、未分化の人間存在の核に直に響くものである。ここに<崇高性(sublimity)>の根元的な光が薫りたっていることを、詩と音楽の偏在的な充溢のリアリティの裏付けとして認めようとするひとがまさか私ひとりではないことを願いつつ...

ギブソンまつい・けいこ
神田外語大学 教授